

第二回キリスト教講演会

「令和の時代の キリスト教と隣人愛」

桃山学院大学 チャップレン 宮嶋 真

はじめに演題に関して一言申し上げます。

「令和の時代の」という冠をつけさせていただきましたが、これは私の考えの中には最初ありませんでしたが、主催者側のご要望もあり、追加させていただきました。以前の私なら、ひょっとすると、その要請を受けた時点で、今日のお話を丁重にお断りしようかと考えたかもしれません。しかし、最近だいぶ年をとってきたのか、柔らかくなりまして、これは逆に私の思いをお話できるチャンスを与えられた良い機会だと捉えました。ですから、少しそのような話を最初にさせていただきます。

新しい天皇のおじいさんにあたる、昭和天皇の時代に先の大戦は行われたのですが、その戦争開始の決定は昭和天皇の出席する御前会議で決めたということです。戦争を始めようという最終的な決定に、最高責任者として昭和天皇が関わったということです。ですから天皇に最終的な責任があると私は考えております。もちろん戦争をやめるほうの、敗戦の決定も御前会議でされたのですが。

私は、いま桃山学院大学で、インドネシア・ワークキャンプ実施する担当者でもあります。これは30年以上の歴史があるキャンプです。ですからインドネシアと日本の関係についても関心があるのですが、戦争中に日本はインドネシアを占領します。そして、1943年の御前会議で、占領したアジアの国々をどのように扱うかということに関して「大東亜政略指導大綱」というものを決定します。それによると、インドネシアについては

「六 其他ノ占領地域ニ対スル方策ヲ左ノ通定ム 但シ（ロ）（ニ）以外ハ当分発表セス
(イ) 「マライ」、「スマトラ」、「ジャワ」、「ボルネオ」、「セレベス」ハ帝国領土ト決定シ重要資源ノ供給
源トシテ極力之ガ開発竝ニ民心ノ把握ニ努ム (wiki source 「大東亜政略指導大綱」より)
とあり、インドネシアの主要な島々は大日本帝国領土とすること、重要資源の供給源としてできるだけ開発し、現地の人々からの抵抗がないようにせよということです。

先の天皇の時代に起こした歴史の真実、何を目的としてアジアに侵攻したのかをしっかりと認め、その反省に立って、この令和の時代にアジアの国々を隣人として、隣国として認識していくことが大切です。それが今日お話しする、キリスト教と隣人愛のテーマに関わっているように考えております。

さて今日のテーマ「キリスト教と隣人愛」ですが、「隣人愛」は、キリスト教の専売特許のように言われています。しかし、その原点は、ユダヤ教にあります。もっと言うと、ユダヤ教の考え方をキリスト教が自分のものにしていったのです。

旧約聖書（ユダヤ教の聖書）のレビ記19章18節には「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」とはつきり隣人への愛が律法として書かれています。しかし、この規定にある「隣人」とはあくまでもユダヤ人同胞を指す言葉でした。そこでイエス・キリストは、「隣人愛」を唱えながらも実際には貧しい人々を虐げている律法学者、ファリサイ派の人々の行動、すなわちユダヤ教団の姿勢、神殿の支配体制、社会の構造そのものを批判していました。

有名なルカによる福音書10章25節以下にある「よきサマリア人」のたとえ話はそれを鮮やかに示し

ています。（スライドで、簡単にストーリーを紹介）

強盗に襲われて傷ついたユダヤ人を、同胞の隣人であり、しかも律法を守る指導的立場にある祭司やレビ人が見捨てて避けてしまうという物語です。イエスとの問答の中で「もっとも大切な撃は、神への愛と隣人愛だ」と言い切った律法学者に対して、イエスは「この話のように隣人愛が同胞のユダヤ人の間で実践されていないのに、あなたたちが忌み嫌いさげすんでいるサマリア人のほうが実践しているではないか。あなたもこの人のようにやってみたらどうか。」と問い合わせたと思われます。この問い合わせをさらに強く表現したのが「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」というマタイによる福音書5章44節に記録されているイエスの言葉でしょう。そしてこの精神が、パウロなどによって異邦人へと開かれた宣教を受け継がれ、異邦人世界、ヨーロッパ世界に広がっていったと考えられます。

さて、イエスのこの精神がどのように受け継がれていたのか、これからいくつかの時代で見ていくたいと思います。初めにイエスの死後成立した初代教会ではどうだったのでしょうか。

ルカ福音書の記者ルカが記したといわれる「使徒言行録」にはイエスの弟子たちの最初の教会活動の様子が4章32節以下に描かれています。

「信じた人々の群れは心も思いも一つにし、、、全てを共有していた」

初代教会にあっては隣人というよりは家族といえるほどの一体感があったと思われます。これは原始共産制と呼ばれたりもしています。そしてこの麗しい共有の撃を破った人として「アナニアとサフィラ」という夫婦の物語が描かれています。アナニアは自分の土地を売り、妻のサフィラも承知で代金の全部ではなく、一部を教会に持ってきてささげました。そしてそのことを使徒たちに問われたときに嘘を言ったということで、夫婦共に「神を欺いた」とされ、息絶えるというお話です。何かカルト教団を連想するようなお話です。彼らは確かに全財産ではなく一部しかささげなかつたのですが、それで命までも奪われなければならないのかと大いに疑問が残ります。全財産をささげなければこのようになるよという脅しのようなお話で、これが事実そのものであるなら、私は大変嫌なお話だと思います。余談ですが、福音書の中で漁師だったペテロやヨハネたちが、イエスに招かれて弟子となった話の中で「彼らは網を捨ててイエスに従った」というマルコやマタイ福音書の表現が、ルカ福音書では「一切を捨ててイエスに従った」とせり上げられています。初代教会がその結束や一体感の醸成のためにこのような話を強調したのではないかと推測されます。共有の精神それ自体は隣人と分かち合う精神でもあり大切なことですが、それがこのような形で強調されるのでは隣人愛の精神からは全く離れたお話のように感じます。

ただこの共有の精神、分かち合いの精神は、キリスト教が異邦人世界へと広がる過程でとても大切にされていったと思われます。

キリスト教を異邦人世界に広めた立役者の一人であるパウロは、ローマの信徒への手紙13章8節以下で「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな撃があつても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。」と述べています。また同じく12章13、15節では「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」とも書いています。パウロの語る隣人は、ここでは、聖なる者としてのユダヤ人（あるいはクリスチャン）のほかに旅人が入っています。この旅人と訳されている言葉は「よそ者、無権利者」などユダヤ人の枠を超えた人を意味しています。エルサレムにとどまった弟子たちの教会から、キリスト教がヨーロッパへと広がる過程で、イエスの目指した隣人愛の精神は、少しずつ枠を広げていっているように見えます。

それを裏付ける資料があります。

キリスト教がローマ帝国に公認され大きく広がった4世紀に「背教者」と呼ばれた皇帝が登場します。ユリアノス帝です。彼は古代ギリシャの文化・芸術を愛した教養人で、キリスト教が広まった帝国にもう一度伝統的ギリシャ宗教、ギリシャ精神を復興させようとしました。それで、「背教者」とキリスト教側から名づけられたのです。彼が小アジア、ガラテア州の大祭司アルサキノスにあてた手紙を少し長くなりますが紹介します。現在残されているキリスト教側の歴史資料では、キリスト教の良い点などを誇大に表現したり、自分たちを正当化する表現がなされ、信頼性という点では問題があるかもしれません。それに比べると、キリスト教に反対する側のユリアノスが認めるキリスト教に対する良い評価については、信頼できると思われるからです。

「無神論（＝キリスト教のこと、ギリシャの神々を尊敬しないのでこのように呼ばれた）をこの上もなく発展させた理由は、他者に対する人間愛、死者の埋葬に関する丁寧さ、よく鍛錬された生き方の真面目さである、（中略）このそれぞれを、我々の方も本気になって実行するのがよいと思う。それも、あなただけがそうする、というのでは十分でない。ガラティア地方にいるすべての祭司が一緒になってやるのでないといけない。（中略）それから、祭司たちに劇場に入りたり、飲み屋で酒を飲んだり、恥ずべき、うさんくさい仕事や商売に近づいたりしないよう、勧めるがよい。あなたの言うことを聞く者を誉め、聞かない者を遠ざけよ。それぞれの町に救護所（＝よそ者を迎える場所）を多く設置せよ。外来者が、我々の人間愛に預かができるように。我々の外来者だけでなく、他の者たちも、必要があればそれにあずかれるように。必要な手立てをあなたが得られるように、私は次のように配慮しておいた。すなわち、ガラティア全土に対し、毎年三万モディウスの麦と、六万セクタリウスの葡萄酒を与えるように、と。

（田川建三 キリスト教思想への招待 劲草書房 2004 p123）

ユリアノスの考えでは、キリスト教が発展した理由は ①他者に対する人間愛 ②死者の埋葬に関する丁寧さ ③よく鍛錬された生き方のまじめさ であるという。これが、ユリアノスが見たキリスト教の長所である。そして、これをガラティア地方全土で見習えと命令しているのです。

また、祭司たちは品行方正になれ。そして町ごとに救護所を設けよ。（救護所とはよそ者に宿泊、食事を提供する場所。病院。養老院、孤児院的な機能も果たした場所）。そこには我々の外来者（ギリシャ人の内でよその町から来た人）だけでなく他の者たち（民族に関係なく全ての人）も入れなさい。非常に広い範囲で受け入れ、我々の人間愛に預かれるようにせよ。隣人愛を人間愛としてとらえ、推進しようとしたことが明記されています。

ローマ帝国として、隣人愛のアイディアを組織化していくこうとした皇帝ユリアノスの願いは、果たして背教者と呼ばれるものだったのでしょうか。

イエスのたとえ話の中にもう一つ今日のテーマに関連するものがあります。それはマタイによる福音書20章1節以下の「ぶどう園の労働者と賃金」の話です。

天国は次のようにたとえられるという書き出しで、ある主人がぶどう園で働く労働者を雇いに出かけていく話です。夜明けに出かけた主人は1日1デナリオンの約束で労働者を雇い、ぶどう園に送ります。9時と12時と3時にも労働者を雇った主人は、午後5時にも広場に出かけて労働者を雇います。夕方になって、主人は5時に雇った者から順に1デナリオンずつの賃金を払います。朝から働いた者が文句を言うと、主人はそのようにしてやりたいのだと一蹴します。そういうお話です。この話を学生に聞かせて感想を言ってもらうと、ほぼ一様に「これは不公平だ」、「働かない者が賃金を得るなんて」と

いう反応が返ってきます。しかし本当にそうでしょうか。これは天国のたとえ話とされていますから、イエスも現実がこうだとは言っていません。むしろ天国でこうあるように、現実でもこうであってほしいな、という話ではないでしょうか。

朝早くから雇われる者は、おそらくいかにも元気よさそうで、よく働きそうな人間でしょう。それに対して夕方 5 時に雇われた人は、「誰も雇ってくれなかった」と言っているように、働きたくても働き口がなかったということです。こうした日雇い労働で、その日の賃金がもらえないということは、その日の食事にも、宿にもありつけないということです。すると、賃金をもらって食事をし、寝床を得た人とそうでない人との間では、翌朝の労働者採用時に、更に差がつくのではないかでしょうか。働くチャンスがあるのに働かない人は問題外としても、働くチャンスに恵まれなかつた人にも、その日に必要なものが与えられてもよいのではないかと主張しているのがこのお話です。これはイエスがガリラヤの貧しい農民の生活を見ていて痛切に感じたことだったと思われます。

このたとえ話を中世から近世の農民や、都市市民たちは大切にし、村や町の中で、困っている人たち、またよそ者といわれる人々にも手を差し伸べて支えあうシステム、今で言う社会福祉施設や失業保険、健康保険という社会保障制度などのセーフティーネットを歴史の中で作り上げてきました。

また特に、ユリアノスの改革の中で出てきた救護所という考え方が発展して、hospice, hospitalis(病院) hospitale (ホテル), hotel de ville(市役所), hotel de Dieu(神のオтель=病院、施療院) などが有力者によって町に寄贈されたり、町の人々が協力して建設していきました。ドイツにおいてはシュピタルとよばれる同様の施設が各地にたくさん作られました。そしてこれらを運営していく費用を捻出するために、施設のほかに、ぶどう園、農地なども寄付され、そこからの収入が運営費に当てられました。今日観光地となっているシュピタルにぶどう園やレストラン、パン屋などがあるのはその名残です。

このようにして隣人愛はキリスト教の歴史のなかで連綿と受け継がれ、今の社会制度にまで影響を与えてきました。そこで現代の私たちにとって実行可能な隣人愛の実践とは具体的にどのようなものでしょうか。最後にこれを考えてみます。

レビ記でも、ルカ福音書においても、隣人を愛する前提として「自分を愛するように」という言葉がつけられています。「自分を愛する」とは具体的に何をすることでしょうか。金儲けをして自分が豊かになることでも、何か自分のやりたいことをやりたいままに行うことでもないでしょう。

わたしは、I'm OK, I'm Happy (わたしは大丈夫、わたしは幸せ) と自分自身に絶えず語りかけることではないかと思います。そしてその後の隣人を愛するということは You're OK, You're Happy (あなたも大丈夫、あなたは幸せ) と相手に語りかけ続けることだと思います。

これは心理学の知見からも、人間としての成長にとって大切なことだとと言われています。

アメリカの心理学者マズローが提唱した有名な「欲求 5 段階説」があります。

- 1) 生理的欲求（食べる、寝るなどの基本的欲求）
- 2) 安全欲求（安心して生活したいという欲求）
- 3) 社会的欲求（自分が属する集団を求める欲求、家族、仲間など）
- 4) 尊厳、承認欲求（他者から評価され承認されたいという欲求）
- 5) 自己実現欲求（自分の能力を生かして自分の願う望ましいあり方に近づこうとする欲求）

マズローは晩年にさらに「自己超越欲求」を提唱しました。自己実現欲求を満たされた人間は更に、自分のことを超越し、創造的に何かを実現していこうと考えました。

さて、上で述べた I'm OK, I'm Happy You're OK, You're Happy を自分自身、また他者に語り続

ける（プレゼントし続けるといったほうが良いかもしれません）ことは、マズローの言う4）の段階の承認欲求を満たす働きかけです。承認された自分や他者が自己実現、自己超越へと進むための励まし、力づけにつながることだと考えられます。

この「承認」について、よりよく理解するためにこれをさらに5つの段階に分けて考えてみます。

1) 結果承認 何らかの結果が出たときに承認すること。

学校、社会等で普通に行われています。結果が出ないなら全く認めないのは厳し過ぎるかも。

2) プロセス承認 結果を出す陰でなした努力や、工夫など、その経過も含めて承認すること。

よく観察すれば見えてくる努力や工夫を結果とあわせて承認することはより強い励ましとなります。

3) 行動承認 結果が出なくても、行動を起こし、継続努力していることなどを承認すること。

Nice try! と褒めることなど。結果が出なくても、そのチャレンジ行動を承認して再挑戦への意欲を高めます。

4) 意識承認 行動を起こしていないくとも、やろうという意識があることを承認すること。

「お手伝いしようと思っていたくれたの？ ありがとう」など。思いがあっても、行動に移せていない人に、次の行動へと踏み出す勇気を与えます。

5) 存在承認 何もなくても存在して（生きて）いるだけでOKと承認すること。

究極の安心安全感を与え、人間としての存在を肯定できる。多くの親や神からの承認はこれだと思われます。

「承認」はどの段階においても可能です。1)の結果承認は歴然と見える結果が出ているので、そのまま承認すればよいのです。それでも無視したり、結果を捻じ曲げて承認しない人もありますが。2)、3)、4)の承認は、その人に関心を持ち、その言動をよく観察していないとできないことかもしれません。しかもしも、人を育てていこうと望むならば、特にこの段階の承認を大切にしなければならないでしょう。最後の5)の、その人の存在を根底から認める承認は、無条件の承認ですから、いつでもどこでもできます。自分に対し、他者に対してこの承認をし続けることが、自己の成長にとっても、他者との関係においても基本的に重要なものです。

家族、隣人、隣国との付き合い、コミュニケーションにおいては、このような相手に対する承認をどこまでできるかということにかかっています。相手を信頼せず疑ってばかりいたのでは、承認を与えることができないばかりか、逆に否定する方向へ道を進んでしまいます。まず、自分自身や、自分の国をOKと承認し、その中で、良かったところ、いたらなかったところを見分けることが、本当の自分を愛することにつながります。それが基本にあってこそ、相手を信頼する道が開かれるのではないでしょうか。

I'm OK, I'm Happy から You're OK, You're Happy という承認へ、自分を愛するように隣人を愛しなさいというイエスの言葉の実現に踏み出したいと考えます。

イエス・キリストが生きた隣人愛の道は、どんな人であろうと、その人の存在を承認し、ともに生きるすべを見出そうとした働きかけだったと信じるからです。

（お断り：当日は簡単なレジュメとスライドを用い、録音をしませんでしたので、講演内容そのままをここで再録することはできませんでした。ほぼこのような内容をお話したということでご理解ください。宮嶋 真）